日、信濃ノ帥トタヽカフ時、惡氣アリ、信玄スコシモ憂ナク、備ヲ固シ、列ヲ整テコレヲ待、敵ノ虛ヲウカガヒ討テ、勝利ヲ得タリ、歸テ馬場美濃ヲ召テ、氣ヲ見ルノ法ハ信ズベカラズ、今日カクト語ラレケルニ、美濃、其惡氣ハ敵ノ爲カ、味方ノ爲カ、辨ガタカルベク候ト申ス、信玄、師傳ノ趣ハ身方ノ爲ナリ、美濃、御方ノ爲ノ惡氣ト思召ニ由テ、合戰常ヨリモ戒愼ヲクワヘ玉フ、是ヲ以テ危カラズシテ全勝ヲ得サセラレタルニ候、軍旅ハ唯シマリアルヲ第一トスト、兼テ御意ナサレシハ、此ニテ候ゾト申ケル、信玄又信濃ニ發向ノ時、鳩一ツ庭前ノ樹上ニ來ル、衆見テ口々ニ私語テ喜ブ色アリ、信玄ソノコヘヲ問レケレバ、鳩此樹上ニ來ルトキ、合戰大勝ニアラザル事ナシ、御吉例ニ候ト應フ、信玄、鐵炮ヲ以テ、忽其鳩ヲ打落シテ、衆ノ惑ヲ解タマフ、鳩モシ來ラザル時ハ、衆疑沮スル心アリテ、戰ヒ危カラン事ヲ慮リタマフナリ、

〔大友興廢記十四〕石宗討死之事

此石宗と聞へしは、軍配におゐては、諸家の傳を知て功者たる故に、去九月〇天正六年に、本卦當卦、其外のかんがへをもつて、當年日州の方へ大事を催さるゝ事不相應なるよし申上らるゝにも、宗麟公御同心なし、又當陣におゐても、掛引の利をいはるゝに、鎭周用ひられず、彼是以て勝利なし、去程に、十一日の晩、味方の陣の東の手先より氣立て、敵城の內へなびき入、石宗、野心の氣とかんがへらるゝ、さてこそ其氣の下より筑後の星野蒲池を先として、二心出來たり、また十一日のあかつき卯の刻の終り辰の始、南に血河の氣と云雲氣立て、味方の上にたなびき來る、石宗見て、此氣味方にむかひきたるは、河にて亡べき雲氣とかんがへ、鎭周方へ、使者をもつて申さるゝは、昨日より、萬事の評定にこそ御同心なくとも、雲氣立申候、是はきらい所有儀にて候、せめて此氣の替り迄ひかへられ可然ぞんずる由申されければ、其返答に、此鎭周、元來下男の生れにて候へば、雲の上の軍は仕まじく候、雲はともあれかくもあれとて、無思付返事なり、其外、今度は、一ツとし